Japanese Journal of Applied Psychology
1980, No. 3・4., 45-65

評　論

人間科学としての心理学

——2つの著書の書評を中心として——

松　村　康　平（日本心理劇協会長，関係学会長）
Kohei MATSUMURA (President, The Japanese Society of Psychodrama.)
(Director, Institute for the Science of Relationships.)

本稿でとりあげた著書は次の二点である。

樋口伸吾著「**人間科学への道**」
（平河出版社，1979，309頁）

永丘智郎著「**現代文化心理学**」
（協同出版社，1979，446頁）

この2つの著書の「書評」にあたって，私は，書評の意義を再三にわたって問いただささねばならなかった。そして，この書評が本誌で意義あるものとなるためにはどうすればよいか，きめかねていた。執筆依頼を受けて3か月を過ぎている今日においても，まだ私には迷いがある。

I

應用心理學會編輯「人間科學」創刊號が，1946年（昭和21年）9月1日付で発刊されている。編輯人は應用心理學會代表者：田中寛一（發行人：杵淵五郎，柏書院）である。A5版56ページ，縦組，隔月発行で，本號に限り定價五圓也，送本代五十銭となっている。

「人間科學」の創刊にのぞんで，と題して，K・T生は次のように述べている。

『新生日本の文化の建てなほしに當って，われわれがまづ反省すべきことは過去のわが國がその封建性の手かせ足かせと極端な國家主義との強壓の下に，あらゆる學術文化が形式に陥って，學術文化の基盤に人間を置くべきことを忘れてゐたことである。さらにまた多くの學術は極めて主觀的觀念的に取りあつかはれて，客觀性と科學性とを失ってゐたことである。真の文化を建てるために今日われわれに課せられた使命は文化における「人間の恢復」であり，「科學性の確立」であらうと考へる。この二つの意味において人間に關する科學的研究といふものが今後の文化を建てる上に特別の役割を擔ふことになると思ふのである。』そして『いふまでもなく，人間は渾然たる統一體であって，各局部に切りはなされた部分のみを見る科學の眼からはこの實體を理解し把握することはできない。人間の科學的理解のためには新しい綜合的の眼識を必要とするのである』に続いて，『この間にあって　心理學が人間を對象とする科學の一つとして，その科學性をあくまで保持しつつも同時に人間の全體的統一觀を見失ふまいとして常に努力し来た立場は極めて重要な意義をもつものと考へられる。私はヴントのやうに心理學をもってあらゆる精神科學の基礎科學であるといふやうな主張をくりかへそうとするのではない。ただ今日の科學に課せられた文化における人間の恢復の問題に答へる鍵として心理學がこの綜合の機能を果す使命をもってゐると考へるのである。このたびわれわれの應用心理學會が本誌「人間科學」を發刊するやうになったのも實にこの趣旨に基くものである。』と，述べられている。

次に，目次を追って内容を伝える。

デモクラシーと教育—ジョン・デューヰの教育思想—（武政太郎）；内分泌學から觀た性格學（柿内三郎）；浮浪女子少年の生態（杉田直樹）；新日本の建設と心理學（小保内虎夫）；現今アメリカの心理學界と教育界（フリーマン）；〔新生三態〕◇教員組合の新生（兼子宙），◇教育映

画の新生(望月衛)，◇スポーツ精神の新生(大貫雅敏)；〔研究室探訪〕◇勞働科學研究所，◇脳研究室(東大醫學部附屬)；〔研究抄録〕○性格の研究一神經質及びヒステリーの治癒過程に就いて一(松村康平)，○終戰後における日本の教育事情に關する調査(鈴木清)，○虚偽自白の原因とその防止(植松正)，○精神病患者の作業能力に就て(盛永四郎)，○日本産奴隷狩蟻の行動觀察(古川晴男)；〔編輯後記〕

後記では，『特に本號はどちらかと云へば心理學と教育學とに偏した憾があるが，これも次からはもっと各方面からの人間に關する考察を擴めて真に本誌のねらいである綜合科學誌の特徴を發揮するつもりである』と，述べられている。後記の筆者名は記されていない。しかし，小保内虎夫教授（東京文理科大學教授，日本大學兼任）が本誌の編集に主として参画しておられたことは，編集内容，筆者の見聞などから，明らかである。

なお，〔應用心理學會記事〕が掲載されていて，次のように述べられている。『本誌の母體である應用心理學會も昭和二十一年三月十七日に創立の大會を終へたばかりで，まだ學會としても準備期にあるやうな次第である。どうかこの方にも多數の方々の入會御支援をお願ひ致したい。學會の事務所は當分神田三崎町の日本大學の心理學教室内に置いてある。』それが，應用心理學會の創立に重要な役割を果たしておられながら表面には立たれようとされなかった渡邊徹教授のおられる教室であることは，記事のみからは今日とらえることができない。『會の代表者は慶應大學の横山松三郎教授が當ることに成って居る。』と，記されている。

II

２つの著書の１つ「人間科学への道一心理学の立場から」は，1979年（昭和54年）９月１日発行，「現代文化心理学」は，８月15日発行で，「人間科學」誌の創刊（隔月で月刊にまで進みたい意向が果たされず数号で休刊）から33年経っている。その間に，日本心理学会，日本応用心理学会のほか，幾つもの心理学諸学会が発足し，諸大学，諸研究施設の心理学関係者たちの活動が目覚ましく，幾多の研究・実践活動の成果が蓄積されていった。そのなかにあって，心理学の諸領域において「人間性」が問われ，しかしそれが殊更に強調される場合には，心理学への批判が峻烈になされて批判する心理学者自身の立場をしばしば危うくしたりもしてきた。では，この２つの書物の著者たちは，どのような立場をとってきているのだろうか。

２つの書物から共通にいえることは，２人の著者は，着実にそれぞれの立場を心理学にとり続けてその立場が研究・実践活動とともに発展してきていることである。このことと，「人間科學」誌で提唱されたこととは，どのように関連させてとらえることができるだろうか。

「人間科學」誌では，『學術文化の基盤に人間を置くべきことを忘れてゐたこと，客觀性と科學性とを失ってゐたこと』があげられ，『われわれに課せられた使命は文化における「人間の恢復」であり「科學性の確立」であらう』とされ，『人間に関する科學的研究といふものが今後の文化を建てる上に特別の役割を擔ふことになると思ふ』と述べられている。そして，『心理學が，人間を対象とする科學の一つとして，その科學性をあくまで保持しつつも同時に人間の全體的統一觀を見失ふまいとして常に努力し來た立場は極めて重要な意義をもつ』とされている。その心理学とは何か。『われわれがまず反省すべきことは過去のわが國がその封建性の手かせ足かせと極端な國家主義との強壓の下におかれていて學術文化の基盤に人間を置くべきことを忘れていた』とする，その反省が，このように主張する心理学者たちのその心理学的立場自身への反省をともなっていただろうか。この反省はすり抜けるようにして，心理学が，『強壓下にあっても』『極めて重要な意義をもつものと考えられる』という，心理学の謳歌へとすりかえられてしまったのではないか。

このことに関しては，たとえば，客観的テストによって国民性に関する研究をすすめ，日本人の優秀性を証明してそれが戦争肯定のための資料として利用される結果となったことへの反省がなされねばならなかったはずであり，また，客観的テスト自身への再吟味を必要としたはずだったのである。そして，後者に関する，それと類似する問題が，「人間科学への道」の著者によって追究されていったといえる。前者に関する，それと類似する問題は，たとえば，日本臨床心理学会において，テストされる側の問題，社会的に差別を醸成することへの批判として，とりあげられてきたといえる。とはいえ，

「人間科學」誌の編輯人となっておられる田中寛一教授は，田中教育研究所を創設し，日本文化科学社の事業を推進され，「測定と評価」誌（横組Ｂ５）が同社から発行され「教育心理」と改題されて（1953年３月）からもなおしばらくは「臨床心理」誌(臨床心理研究会編輯，創刊1952年２月，隔月で1954年春まで）も発行されていて，「人間科學」誌での提言はこのようなかたちで実現されていった。また，

小保内虎夫教授は，1948年（創刊號のほぼ１年半後）

に，「人間科學としての心理學」を著わしておられる。「本書は新時代の大學生諸君に現代心理學の大要を紹介し，その一般教養に當てようとして書かれたものである。」続いて翌年には「心理學と文化」が出版されている（両書とも世界社發行）。その冒頭には，「感應心理學の輪廓」が掲げられ，これは『現代心理學に對して１つの寄與をなすものと僭越ながら敢て自負している』と，述べられている。そして，心理学的測定に関して『わが日本の一人の心理學者がたとえ世界心理學界の表舞台に登場しなかったとはいえ，實質的には心理學に大きな貢けんをなしたことを忘れてはならない。それはすなわち故増田惟茂博士その人である。博士の心理學的測定に關する所論は論旨の周到，綿密なる點において近來世界心理學界に現われた測定論中出色のものと言っても決して過言ではない。わが國の心理學者はこの貴重な學問的遺産をゆずり受けたことを喜ぶと共に，この育成，發てんに一段の努力を拂ふことが當然の義務と考える。そこで私も博士のき尾に附いてここに心理學的測定論を試みることにする。』とある。この論文は本書の出版より遡る1933年（昭和18年）４月，「哲學雜誌」に掲載のものであり，書中には昭和３年に執筆されたものまでも含まれて著者の諸研究が集大成され，それによって「人間と文化」への心理学的研究の貢献を明らかにしようとされている。その知覚（錯覚）の実証的研究に誘導されて構築されたとみられる卓越した理論を，わが国における優れた心理学的遺産を継承し発展させていこうとする熾烈な情熱をもって「人間と文化」に展開し，新時代の世代を先導する実践的活動には，「人間科學」誌における提言を責任をもって遂行する姿勢がとらえられる。そして『新日本の建設に對して』『わが國の心理學者が果してよくこの重任に耐へ得るであらうか。筆者はこれが可能を信ずるものであるが，併し在來の儘ではとても見込がないといひたい。』『大學は學生に應用心理學者として必要な素養を何等與へてゐない。』『わが國の場合はこれは學問の盛衰を支配する重大な問題である』として，『大學に基礎心理學と應用心理學の二科を設け，夫々分化した専門的知識と訓練を與へ，真に役立つ専門家を養成する』ことを，提案しておられる。

この提案において，しかし，その提案を可能にする筆者自身の理論的立場がどのようにして構築されたことにおいて「人間と文化」への心理学的貢献をどのような意味で可能にしそのどこに限界を見極めての提言であるのか。そのことを問題にするとき，ここに，２つの書物の著者たちの「実践即理論」的立場と，その研究領域がとくに文化の領域に関して，提案にみられる限界を越えてさらに射程をのばすことで，そのひとつの解答をもたらしているといえるのではないか。とはいえ，

小保内虎夫教授は，梅根悟教授を学長とする和光大学で，大脇義一教授らと共にその創立に際して「人間科学」科の申請に尽力され，設置基準要項にないことが理由としてあげられて「人間関係学科」と名称を変更しての申請が認可されて（1976年１月）からの同大学で，人間科学構想の一端を実現されていった。日本学術会議での活動にもそれはみられるところである。（なお，大阪大学における「人間科学部」の設置は７年後であって，1975年12月には文教大学にまた学部の設置が認可されている。）

Ⅲ

「心理学の立場から人間科学への道」と「現代文化心理学」の２人の著者は，学窓を異にしながらもほぼ同時代に大学生活を経て（樋口教授は東京帝国大学文学部心理学科を1944年に卒業，永丘教授は早稲田大学文学部心理学科を1942年に卒業），終戦後どちらも労働科学研究所員となっている。（同所での両氏の活動について，筆者は知らず，書評を引き受けてからも尋ねることをしていないため，伝えることができない。）両氏の諸著書から知り得ることで，両氏ともに，「思想形成の上に多くの示唆を与えられた」師（樋口「教育評価」共立出版，1956年）「学恩が極めて大きい」（永丘「ヒューマニズムの心理学」松澤書店，1958年）師としてあげているのは，桐原葆見（しげみ）氏（先生）である。（そのことに関しても，筆者は尋ねることをしてていないため，実狀を伝えることができない，お詫びする。）

桐原葆見著「疲労と精神衛生」（桐原葆見博士喜寿記念刊行会，1968年）の「まえがき」には，

『オートメーションを基軸とした技術革新に続く新合理化工作が，広はんに急速に進められているわが産業界の昨今である。最近数年間のその動きの中には，体制の変革をも想わしめるほどのさまざまの革新的なことが行われてきた。』『大学や各方面の研究施設では講座や研究指導が拡張され，国の行政指導も積極的に強化された。また企業内では変貌した労働場面への適応を容易にしようと，新しい教育訓練と人間工学的作業改善とが盛んになってきた。まことに慶ぶべきことであって，われわれには多年の念願がかなって夜が明けた想いがする。そこには傾聴すべき論説が数多くでてきたが，しかしながら人間不在の教育訓練や，労働者不在の人間工学もまた少なくないようである。これにはいろいろ理由があろう

が，結局は労働者の諸問題が，実践の課題としてではなくて，研究の対象としてとりあげられているからだと思う。その限りにおいてそれは労働者の生活には遠い(lebensfern)のである。そこで傍観者（outsider）の安楽椅子（armchair）論議に了ることにもなる。』『われわれの労働科学は，労働者の諸問題をば，研究の対象としてではなく，実践の課題としてとりあげる。これこそが今の時代における生活に近接または融合した(lebensnähe)研究の道だと信ずるからである。そこでどんな場合にも労働者の身内（insider）となって，研究の成果をことごとく労働者大衆の資産として積みかさねてきたのである。』と，述べられている。（なお，「労働科学」と名づけられたのは，1920年であって，その由来が本書の中で次のように述べられている。『大原社会問題研究所の構成からすれば，かなり異質のように見えるこの３人の仲間の実験科学班に何とか名称がいる，というのであれこれと多くの案が出されたが，医学と心理学とを主軸とする労働と生活に関する生物学的研究という内容をよく示す，包括的な名称がなかなか見あたらない。毎夜のように集まってかなり日数をかけたあげく，「勞働科学」にきまった。英語では science of labour とすることにした。』『しかしこの時はまだこの名を「学」とすべく決めたのではなくて，ただこの研究班の所在の名とするために，労働科学研究室としたわけである。これは大原社研の中の社会衛生研究室に準じて「室」としたのである。この名はしかし外での評判は良くなかった。第一に労働と科学という全くちがったものの名を２個ならべてくっつけて意味をなすかとか，当時「労働」も「科学」も特高が弾圧の眼を光らせているものを好んで採用するにも及ぶまい小児病的ではなはだ生硬で，おそらく熟さないであろう。英語の science of laber にいたっては，全く英語になっていない。あちらでは何だか解らないであろう』『等々の批判があったが，われわれはついにこれを押し通して来た。』文中の３人の仲間とは，ほかに暉峻義等とその後輩の石川知福の２氏との３名である。その翌年1921年に「倉敷労働科学研究所」が発足している。）本書中にはさらに，

『労働科学はいうまでもなく応用科学である。その限り常に実践が要請される。そこには研究の，対象ではない，問題があるのである。この解決に役立たない消極的な研究結果は，理論科学では通用するが，ここではおよそ意味がない。』と述べられ，また，『労研創立の頃経営管理にはティラー主義によって代表される合理主義が，世界を風びしていたといってよい。われわれはその科学的管理法（Scientific Management）と称する擬科学に反撥して，それに対抗するためにヒューマニズムの旗印をかかげて，進発したのである。』『労働科学は人間の勞働を研究する実践科学である。それゆえに当然にそれは人間中心主義（人道主義）に立たねばならない。』『真のヒューマニズムは，働く者の主体性，自主性を確立するところにある』『資本も経済も産業も技術も，すべて人間のためにあるのである。この人間中心主義(人本主義)がすなわち民主主義である。労働へ志向する（labour oriented）労働科学は働く人間のために真実に合理的な労働と生活の条件を求めてやまない社会生物科学（sociobiological science）である。そこには感傷ではない，合理的ヒューマニズムがなくてはならない，というのがわれわれの志願であった。それは労働問題の高波がおし寄せていた大正末期から昭和初期にかけての激動時代である。』『この志願と情勢とはわれわれをして早急に何かを世に訴えたい意欲をかきたてて，先ず主張があって，それの裏付けとして資料が記載されてある，という形式の研究報告を書かせたのである。』『当時の学会でわれわれの発表はどこでも興味を持たれて，独歩のおもむきがあったけれども，そこに独断と偏見のしのびよる危険を感じて，学術報告がこれでよいのかと反省をくりかえしたのである。その故に報告には必らず原資料の数字をそのまま掲げて，再計算や再組立てがいつでも誰にでも出来るように配慮した。』『科学の研究はあくまでも人類の福祉のために真理を探究するところの自由な創造活動であって』『自由な研究は当然に現実に対する激しい批判から出発する。』『労働科学は，労働へ志向している限り研究の自由が確保される。』『何物にもとらわれない柔軟な思想の自由がなければ，研究の自由も，したがってその発展も創造もあり得ない。その自由精神に到達するために，もっと悩めよ，もっと遍歴を続けよといつも自分に言いきかせていたのである。』

この姿勢が，この研究態度が，終戦後の東京で労研の再編成，再建の時期に，著者２人の少壮研究員のそれぞれにちがう成長をもたらしたにしろ，共に師と仰ぎ得るその人と，またその人と連帯して研究する他の人たちとも共に，ふるまい，考えて，学ぶ，接在共存状況の発展において形成されていったであろう研究態度，「人生の意味の発見」は，両著者のこの２つの書物に，著者自身には鮮明に，読者である筆者にもなにほどかは，知ることができるのではないか。そしてまた，労研当初の所員たちが『今日もなお「雑学の徒」となって，文字通り昼夜の別なく，時間をまったく超越して，奔命に疲れている。それでいてだれもがそれを悔いない』時代は遠く過ぎて終戦後の再建のときに，著者たちは所員となった，

そしてやがて，離れて，大学に移ってからも，労働をみすえ，社会事象としての労働を研究していくことにおいて要請される新しい原理を追求し，研究の領域をひろげ，大学人であることの「よさ」を活かして柔軟性のある思考を展開することができて，著者たちそれぞれに独自な研究成果を蓄積し，先達の業績を継承し発展させ得ていることを自認して感謝し，さらに謙虚に学び続けて，21世紀を確実に生きると予測される学徒と労働者との連帯関係の，広くは人間の接在共存関係状況の，発展（平和状況）をもたらす永続的な実践変革活動にかかわっていこうとする，静かな意気込みをもまた，そのそれぞれの著書から学び知ることができるのではないか。

Ⅳ

「現代文化心理学」の著者は，その「はしがき」で，次のように述べている。

『いくつかの著作集を経て，本書に至るまで，私が人類の永続的行為である＜労働＞を見すえながら，人間愛と人間形成を主題とした文化心理学の諸問題について，いつも考究を続けてきた基調は，ほとんど変わっていない。』そして，「あとがき」で，『ここに集成したような研究は，いずれも，その一つ一つが，単に器用にまとめ上げたというようなものではなく，二〇世紀に生きていた人間のひとりとして，現代の文化について，学的な「覚え書き」を遺したいと考えていながら，研究を進めたものである。』『現代においては，文化が人類の精神的所産であるという基本理念は承認されるにしても，単にそれだけにとどまらず，かなり“人間愛を保有する文明”という概念に近くなっていて，その倫理性と技術性（＝過程，手段，もしくは方法論）とが，同時に問題とされていると考えられる。つまり，いつ，どこで，だれが，なんのために，どのようにして，文化生産とその利用をおこなうかという発展プロセスが，きわめて厳格に追究されなければならないのである。ゆえに，文化が人間の行動様式であるという単純な考え方は，私は支持しない。なぜならば，“社会進歩”という指標との関連をぬきにしたそのような思考方法（文化人類学などに例が見られる）は，われわれとして最も忌むべき＜人種差別＞とつながるおそれがあるからである。』とする。著者の態度は毅然としている。

本書の第一部：言語―文化―人間愛のⅠは，「文藝技術の心理学」である。著者の研究の系列からいえば『最も古くから関心を寄せている領域』であり『文体をダイナミックなものとして把えて，新しく“文体形成”のメカニズムに注目した諸研究である。』

著者は，戦後に波多野完治氏が，新聞，雑誌，放送の分野にまで拡大された研究（波多野「現代文章心理学」）を見事な業績と把え，文学作品について戦前に発表された一連の労作に関しては，その研究技術の開拓について高く評価する（永丘「人間の社会的形成」寧楽書房，1956年）。そして，『芸術としての文学作品を分析するに当っては，心理学者自身の人間性が』『さらにその世界観までが研究に反映する』『両者の関係は，不可分なのが本来の姿である。』『その意味において，今後は私自身も含めた反省として研究者にも，これまでのような貧困な人間性から脱却して，文学者に劣らないような人間知をそなえなければならない』として，著者は，文学の世界の，著者にとって重要な感動性を学んだ「雪國」の，その駒子の性格分析，島村の行動分析から，戦時中の日本のインテリの問題性，女性の典型をとらえようとする。駒子は，明治・大正・昭和を通じて封建性からのがれ切ることができなかった日本の女性たちが行きついた１つの典型的性格をそなえているとし（関東学院大学経済学会，経済系，第18輯，1954年），そのいわば川端康成の文章への“共感”を踏み台としての仕事をすすめてから，さらに研究を深めていく。そして，本書では，作品が時代状況のただ中での作家の創作であり，文体は作家の＜観念＞の＜外皮＞であり，基本的には「時代」と作家の＜思想＞を追いつめること，康成的文体の特質も，それを真に理解しようとするならば，優れて社会心理学的なパースペクティヴを必要とするとして文体論を展開する。川端康成の文体について，そして，むしろ今後の研究を必要とするものとしての井上靖の文体について。文体論をすすめる研究手法としては「招魂祭一景」の描写・文体論の章（第３章）で，３つの仮設を立てて検証する作業形式をとっている。第１章は，＜自作否定傾向仮設＞である。第２は，＜会話による思想表現仮設＞である。第３は＜文頭文体の全篇拘束仮設＞である。ここでいう文頭文体とは，冒頭描写ではない。それを含めて文体にまで定着させた文姿である。そして，康成の中篇～長篇小説にも及ぶ考察をして，いずれの仮設もほぼその正しさが立証されたとしている。

処女作「招魂祭一景」から少なくとも「雪国」までの時代における康成は，次の図式のいずれかのパターンを歩んできたという。≪前作文体の否定／前作思想の肯定≫≪前作文体の肯定／前作思想の否定≫≪前作文体の否定／前作思想の否定≫≪前作文体の肯定／前作思想の肯定≫。前作とは，少しさかのぼる複数作品をさし，単一の作品を意味してはいない。三島由紀夫の“永遠の旅

人” 評は，『“作家と，その描く対象との間の，永遠の関係”』を意味し，『川端文学が追求しているテーマが，なかなかすぐにはつかめぬほどの困難性を内蔵していること』の認識にたって，諸作品の丹念な読みに，作者の思想へとどく透徹した思索が展開され，たとえば文体の＜不安定の美しさ＞にとらわれて表面的に流れる諸見解には批判的意味をもつ論述がなされていく。

なお，時局のただならぬ動き，＜二・二六事件＞などによるととらえられる，雪国における文体および構想の転換，“濡れた髪を指でさはつた。—その觸感をなによりも覚えてゐる，その一つだけがなまなましく思ひ出されると，島村は女に告げたくて，汽車に乗った旅であった。／「あんた笑ってるわね。私を笑ってるわね。」「笑ってやしない。」「心の底で笑ってるでせう。‥‥」” という書き出しの削除，そしてあの“国境の長いトンネル‥‥”の，作者が何気なしに書き流していた部分の改作，彼のやむをえない“転向”がなかったら，次に述べるような川端康成の文学的特質は保全されていたこととなる，としている。(1)「純粋の声」にプロトタイプが存在する“声の美しい少女”である葉子を媒体とした＜処女崇拝＞の傾向。(2) 素人娘とも芸者ともつかぬ駒子が，一本立ちの芸者になっても，まだういういしさを残し，現代女性像のある種の典型として，男性から愛される造型の創造をなしとげたこと。(3)「禽獣」の発展形態として，その主人公の延長における無力な知識人の典型である島村を通じて，“白い朝”の雪の照り返しのように生き生きとした駒子の思想と行動との中に，戦時下日本の下層庶民階級の健全さを歌い上げたこと。(4) 日本の山河がこれほどまでに美しい自然であったか，ということを改めて認識させてくれたこと。(5)「自作や自作中の人物への愛情は，人に知られたくない片恋のやうに，ひそかに通(かよ)ってゐるにちがひなかった。」(「年の暮」) というように，島村を肯定し，「私は戦時中も政治の言葉をそれほど信じなかった。」(「東京裁判判決の日」) と述べている如く，日本のインテリゲンチャが示したある種の対軍国主義的社会認識，人間の本質としての楽天的人生観を見事に文学化した功績。

第1部Ⅱは，「適応機制の心理学」である。この後半，第7章「人間愛研究の方法論」においても，川端康成の「愛憎心理」，「女性崇拝」が述べられ，第8章は「川端康成の戦後人間愛」である。Ⅱの前半においては「限界状況における人間行動」「社会臨床心理学の領域」が，章を追って述べられていく。

第二部：労働—科学—人間形成には，Ⅲ「労働技術の心理学」とⅣ「科学技術としての心理学」が含まれている。Ⅲは，第9章から第12章まで，「産業適応論」「職業技術教育と労働組合」「労働能力開発の方法論」「情報社会の心理」である。これらにおいて，著者は，『文化としての労働を主体的にささえる労働者層の立場と心理を明らかにすると同時に，文明批判の心理学を展開』している。これらは，『著者の文化心理学的研究の中核部分を形成するとともに，最も長い期間をかけた研究』である。そのうち，第9章「産業適応論」は，著者編著「産業適応ハンドブック」(朝倉書店，1964年) に収録され，“永丘の産業適応論”の名称で呼ばれている重要な論考である。

産業適応とは『新しい包括的な概念であり，次のような諸適応をすべて含む。「労働適応」「職業適応」「職場適応」「職務適応」』。『われわれは，労働を狭い一企業体のワクの内だけで考えていては，真の適応というものの本態がわからなくなる。あたかも，演劇の上演にリハーサル (事前練習) と本番があるように，産業適応も，本番のみの考察ではわからないことが多いであろう。本稿では，リハーサルに相当するものを第一次 (産業) 適応と呼び，舞台裏の生活を含む演劇集団への適応にあたるものを第二次的なそれと考え，上演後の演技とかセリフにたとえられる職務に対する熟練を第三次的な適応と称することにしたい。』

産業に適応するということは，『基本的には，いわゆる産業化(Industrialization) に対応する人間の生活適応である』『この最も基本的な産業生活への適応状態を，第一次産業適応(第一次産業への適応ではない)と呼ぶ』『このような段階の問題としてとらえられる必要のあるいろいろな事象のなかでも，国民性と教育体系は，ここで，ぜひ取り上げなければならないことがらであろう。』『第一次的産業適応を規定する条件として，それぞれの民族・人種・部落住民などが伝習してきた労働慣行は，大きな影響を与える。』『労働慣行は，人生観，社会観，世界観とのつながりを介して，国民性と結びつく。国民性の形成に関与している条件は，さまざまであろうが，ここでは，労働，勤労，働くことなどと呼ばれている側面から国民性を問題にすれば』『いろいろの条件にささえられた産業の在り方と深く結びついている。ゆえに，“働き過ぎる”国民性は，貧困であるということだけではなく，よく働かなければならない生活上の必要性と，それだけ働く余地のある産業の性格とが，からみあって成立するのであるし，その両者のバランスが，少しでもくずれると，そのような勤勉性は見られなくなる。』『国民性形成の観点から見逃すことができないのは，家庭教育である。すなわち，両親，家族の労働が子どもにどの

ような影響を及ぼすかということになると，家庭の在り方が問題となる。』また，『教育と産業との関係は，国策を反映しながら，一応は産業化の各段階に照応する教育内容が盛り込まれてきたとみてよい。しかしながら，その両者の関係は，必ずしも正確に対応したものではない。それはもともと教育理念と産業理念とが，それぞれにもっている根本的性格の違いからきている。』『次第に，産業理念が教育理念に，道をゆずらなければならなくなっているのだが，過渡期の悩みとして，個人の第一次産業適応がうまくいかない現実が，全般的に存在している。それは，まず，事実問題として，義務教育を含む全教育体系が，あちらこちらで分断されているからである。』『第一次的産業適応として，最も必要なことが，労働に対する組織された体験であるのに，戦後の社会科教育では，それが経済学的知育教育にすりかえられている。』『労働態度教育の大半は，いわゆる“しつけ”教育として，各家庭の責任だとされてしまっている。唯一のとりえは，科学教育が理科・数理系の学科という形で教授されているくらいであろう。そして，労働適応は人間が労働過程への参加を通じて，人間形成と社会的生産を同時に行なうことだと教えられずに，逆に，企業的生産と企業的従属のために，人間が職業から選ばれるのだということを，事実として教えてしまうのである。第一次産業適応が前者の立場からなされるのか，また反対に後者の立場から第一歩を踏みだすのかということは，その後の第二次・第三次的適応にまで影響を与える別れ道となる。』『第二次的産業適応と呼ぶ状態とは，特定の職業が選択されて，完全に産業社会のただなかに個人が定着した場合，そこで起こるさまざまな生活適応』をいう。『あくまでも産業生活に対する全体的な人間の反応』であり，『ある意味で，かなり感情的・情緒的な適応である。』『この適応は，かなり意欲的な働きかけがなされ，且つ，個人みづからも，積極的な能動性を持たなければ，達成されないものである。』『個人の欲求，希望，人生観などから，組織そのものの在り方，現代倫理の探究，厚生施設その他，物質的・経済的条件なども，明らかにしていくなかで，第二次産業適応の本態が，より正確にとらえられていくべきである。』『第三次的適応の問題性は，わが国においてとくに，まだ第一次的適応も第二次的適応も，十分なものではなかったということにあるであろう。』『第三次的適応は，労働技能の獲得を通じて，労働者的精神，すなわち，働くことを通じて，社会的生産に参加することの喜びを満足させる効果を持たなければならない。さらに，また別な表現によれば，生きることに対して，労働者が自信と責任を感じることのできるような配慮を含んだ適応状態だともいえるし，そのような状態は資本制生産のもとにあっては，かなり労働者側からの積極的な働きかけに期待されることも大きい。』なお，“産業適応”という新しい概念は，『自覚を含む人間変革過程を内包させて，かなり教育的要因を帯びた“適応”』であり，役割行動だけにとどまらない。

Ⅳは，「人間性と現代心理学の課題」「産業心理学の方法論」「人間形成と労働青年心理学」「適性心理学の立場」で，“福祉技術としての応用心理学”に関連のある論述が多い。科学・技術を含む文化と，人間の在りかたとの関連をかねてから注視し，「ヒューマニズムの心理学」の著者でもあればこそ，『欧米におけるヒューマニスティック・サイコロジー（＝人間性の心理学）と志向を同じくする心理学が，日本という風土の中にも存在していたということを広く知ってほしい』と願うのである。なお，補録「マス・コミュニケーションにおける文学的表現の成立について」は，著者の20歳台の初めに，資料集めとノート作りがなされて後に肉づけして論文化されたもので，内容は，九つの短篇小説として発表されたものを１つの中篇小説にまとめた「雪国」について，部分的に発表されていた時代の掲載誌の原文と「雪国」（昭和12年版）の文章とをくわしく比較したものである。著者は『批評嫌いで有名な川端氏だが，この初出論文をとても喜ばれて，御達筆な毛筆の感謝状と御署名の入った“全集中の随想篇”（書面のまま）を頂いた』と，本書の「あとがき」で述べている。

Ⅴ

「心理学の立場から人間科学への道」は，７章からなっている。本書の構成は，所収論文の発表年次順に，『テスト―その理論的展開』『「創造性」と二つの思考型』『再生と再認』『心理学における公理』『産業行動学の研究方法について』『芸術におけるイメージ』『「日常性」の心理学』（1969年から1979年まで）となっていて，序と後記において，諸論文と「人間科学」との関連づけが，著者によってなされている。

第１章から第３章までの３論文は，著者が神戸大学文学部に在職中に公表されており，内容的には最初の論文は「能力開発研究所」研究員としての業績とかかわり深いものと，考えられる。著者の前著「教育評価」（1956年，共立出版）は，東北大学在職中のものである。そして，本書の第４章から第７章は，現職，大阪大学人間科学部に在職しての諸論文である。このようにとらえると，本書の諸論文を貫ぬく『ひとつの基調音』がきこえ

てくる。それは，「人間として」の著者が，心理学専攻者として誠実に，社会的所属の要請にもまた「自己として」誠実にふるまうことの奏でる和音である。

第1章『テスト―その理論的展開』では，テストの古典的理論の立場に次いで，ロード，クロンバーク，そして著者の（藤田との）立場が述べられ，テストのすすむ道が探究される。著者は，客観テストに対する非難にこたえて，必要なものは，この形式によってどの程度まで深く能力がとらえられるかという実証的論争であって，これでは真の能力がとらえられないという感傷的論議にふけったり，非難したりするのは閑人の仕事である，としている。そして，形式ゆえにそれを捨てることをせず，与えられた枠組の中でいったい何ができるかを追究していく，それは，かつて俳句を創造した俳人たちの問題であったし，われわれの問題でもあった』という。第2章『「創造性」と二つの思想』では，橋本教授の諸論文によって啓発されつつ，はじめは「デジタル型思考の展開」を，次に「アナログ型思考を求めて」論考をすすめ，「"創造性"とは何か」にこたえて，『「創造的」な思考活動というような精神作用は存在していないのである。そして，デジタル型思考は，アナログ型思考の捉えたものを論証するために使用される。したがって，「創造性」の本質は，アナログ型思考のうちにある。』アナログ型思考は（教授にあっては），『極度の単純化にむかう強烈な動きと，先入観を潔癖に排除しようとする傾向をいう，むしろ精神の原型といったほうがよいのかもしれない』という。教授の諸業績をめぐる著者の遍歴『「いつも我田引水的な仕方で哲学者ぶる」ことをあえてなしたこと』，これは『諸論文を読みその本質を紹介する仕事を与えられ』てであり，諸論文に内在・内接的にかかわる姿勢をとり，方法としては外接・外在的な分析方法も駆使して，著者の思考の内的発展がもたらされ，教授のそして著者のそのどちらもがかかわってそれぞれに発展可能な，接在共存状況（接在共存的思考過程）が成立し展開していく。このことの洞察は，著者の遍歴の『結語ならぬ結語』に，新たな意味を見いだすであろう。第3章『再生と再認』は，著者自身が『芸術史家になったり心理学者になったりして自問自答し，実験について思いめぐらした時期の所産である。』著者は，「創造的再生」について論じてから「むすび」で，『こういう深い再生・再認という事実が，心理学であつかわれるのは，いつのことであろうか。』という。

第4章『心理学における公理』は，著者が本書の『序』において，本書の論文には『ひとつの基調音が貫ぬかれている。それは，心理学は人間科学の一部として位置づけられることにより，その意味を明確化し得るという構想』の顕在化している主要な論文である。われわれの眼前にある深刻な現実『産業行動学の分野において頻々と生じる事例もまさしくそれである。われわれは，単なる抽象的な「労働」を取り扱うのではなく，企業と労働者との激しい利害の相剋の下に成立している社会的事象としての「労働」を研究している。企業も労働者も，生存の確率の最大化をきびしく要請し，それにしたがって行動している。』『これを単なる生理・心理的現象として分析していくわけにはいかない。それは，同時に現代の社会・産業機構の産み出した全人間的現象であるからである。』『したがって，従来の生物的な心理学とは異なった研究の原理が要請される。それは，まさしく，理論的にも要請される原理でもある。』『その原理―あえて心理学の公理といってもいいであろう―』その公理は『人間は常識的に各生体群の至適化（Optimization）を目指して行動し得るし，また，それを目指して行動しなければならない生物であるという認識に基づく，いわば，至適化の原理である』この『至適化を目指し得るし，また，それを目指さなければならない。この努力を行動面において捉える研究を心理学という』『この公理の結実性は，これから問われる問題である。また，この公理は，人間科学のそれであって，心理学のそれではないというならば，私として，心理学という名称が人間科学の中に渾融していくことにいささかの異存もない。』第5章『産業行動学の研究方法について』は，次の文章でむすばれている。『常に事態に応じて変換し得る実験者の視座，自分の視座を常に制御しつつ柔軟に対象を解析し得る実験の精神，絶えざる現実への回帰による事実の確認，これが産業行動学の本質的な方法論となるのであろう。いや，それは人間科学全般の方法論につながるのかもしれない。」と。そこに到達するまでには，『シミュレーションとしての実験』が吟味され，『現実認識の視座設定の基礎としての実験」に論及されていく。そして，コーエンの言葉から『事実はしばしば近づきがたいばかりでなく，われわれが事実としているものは，多くの場合，まったくの錯覚である』という，その『「まったくの錯覚」を正しい認知に導びく手段として，心理学の実験は，ふたたびその地位を回復する』とし，次に，『労働を内側から捉える方法について』論述する。労働者の身内（みうち）となっての研究，労働（者）を内側から捉えようとする方法における『襟を正して聞くべき現実的な体験』を認めながらも，『みたいもののみをみるという視座確定の結果を生みだす危険性をもっている』とし，『実験自体が厳として生きた人間の行動を取り扱っている』事実にた

ち，実験において『絶えず，みずからの視座の固定化を避けようとする研究方向の激しい変換があった』『産業行動学者たるものは，ひとつの職業名をあげられた場合に，それに従事する人びとの作業と生活とをありありと視覚化し，映像化することが可能でなければならない。それを可能にするものは，実験で鍛えられた柔軟な視座による行動の客観的分析であろう。』という。第六章『芸術におけるイメージ』では，第三章をさらに深化させ，『芸術と産業行動学ないしは人間科学を結ぶ微妙な存在，イメージの本質をつかもうとし』ている。『芸術におけるイメージは』『個人のもつ資質からだけではなく，個人と古典的なもの，規範的なものとの出会いによって発生する。』イメージは『産業行動学のようなより現実的な課題を取り扱う学問においても，ひとしく切実な課題となっている。』『イメージこそがわれわれの実生活に絶えず生じている心理学的事実である』『自動車の運転行動，工場内における看視作業，検査作業，単純反覆作業等，すべてイメージに先導されて行動が進められ，かつイメージと現実との一致の確認という作業がパーフォマンスに対して大きな役割を占めている。わたくしは，芸術における創造の精神に着目したことのないものには，これらの問題の真の解明はおぼつかないと考える。』第７章『「日常性」の心理学』では，『「いつも眼前にある」事象から出発』し，日常性の『その変身のもつ重みに耐えて，科学者として「日常性」を探究し続けるところに，心理学の真の様相が表われるし，この事態の洞察が実験そのものの意味を支える』とする著者の立場が明らかにされていく。

VI

これまでの論述においては，「人間科学としての心理学」「人間性の心理学」「人間科学の一部としての心理学」の，意味するちがいは目立たせずに，わが国における「人間の科学としての心理学」の系譜に位置づけながら，２つの著書の内容紹介を主として，論述をすすめてきた。残されているのは，この論述がどのような立場からなされているかを明らかにして書評を媒介とするどのような発展的成果がもたらされるか，それを著者たちにのみ委ねることなく，筆者の立場からの提言を行なって，読者においてもなにほどかでもそれがもたらされ著書からさらに多くを学ぶ機会のつくられることを望みながら，なおしばらく論述をすすめることであろう。

「人間科學（創刊號）」研究抄録への寄稿の機会が与えられて筆者は，人間構造（性格）の諸型を人間関係から措定するにあたり，『自→他→自，他→自→他の還帰運動が社会生活の基底をなしてゐる』とし，それと同時に勾配（Gefälle 傾斜）を本質的な元型的事実として把握し，資料を，中村古峡療養所過去12年間において患者により書かれた療養日誌から得て，神経質およびヒステリーの治癒過程を，施行される一連の作業療法〔作業労働。動植物，土地，道具などの自然（物）とかかわり形成される人間の生活縮図的な活動〕との関連において究明した。日本応用心理学会編「心理学講座」第12回配本（1954年）「精神衛生」の執筆者となることができては『精神衛生の運動は，個人の力を増進するばかりでなく，社会の改善をも目ざさねばならない。精神衛生運動が，世界的なものとなったきっかけは，実にかかって精神病者として病院生活をおくった人の，社会への義憤であったとすらいえる。』『この人は，ビアース（Beers, C. W.）という。』これに続く叙述は次のように結んである。『長い一生を精神病者のためにささげ，はじめは医員として，後に，公私さまざまの病院長としてはたらいた人は言った。「けっきょく，精神病者が一番必要なのは，友である」と。』『この言葉は，私の心を打つ。私たちの心を打つと，私は，許されるならばここで書きたい。根本には，ひとしく人間であることの認識と，深い愛にねざした熱意あるはたらきかけのなかに，「魂のであい」（失われようとする人間の心がふたたび取りもどされること）を信じて，「精神衛生運動」は，発展の第一歩をあゆみはじめたといえるのではないか。』〔なお，本書「精神衛生」において「ゲシュタルト療法」（パールズ Perls, F. S. ほか）の原理と技法の一端が紹介されている。〕その数年後に，次のような序文を書く機会があった。〔フォルトゥナートフ，ペトロフスキー著，原田伸夫訳：ソビエト心理学入門，1962年，新書館〕『心理学は，「人間科学」の基礎科学である。』『心理学は，人間の心理過程と心理特性を研究する科学であるが，その研究は，人間の意識と行動に対して働きかけ，それらを組織的に変革・発展させることに，役立つものとならねばならない。』『この心理学が発展するならば，人間の心理を媒介とする社会変革の可能性が増大して，社会関係の落差のもたらす敵対関係による変革のゆきづまりも，打開する通路が，開拓されるはずである。』『心理学の発展とこの科学における世界各国の提けいは，そのこと自体が，基本的に，客観的現実から相対的に独立した人間独自の世界を尊重することであるから，政治関係における葛藤の解決にも，大きな役割を果たすはずである。』

日本応用心理学会「応用心理研究＜特集＞：平和のた

めの心理学」（法政出版局）が刊行されたのは，1967年である。編者の乾孝氏は「はじめに」次のように述べている。『1966年10月6日，法政大学でもようされた日本応用心理学会第33回大会の一環として，多くの心理学者が，平和と心理学との問題について論じあった。本書は，そのときの記録および，この集会に対して，諸外国から寄せられた文書による提案・意見にくわえて，同年モスクワで開かれた国際心理学会でのペーパーを今田恵教授のご好意で収めることができた。』『小冊子ではあるが，この形にまとまるについては内外の，また専門，非専門の多くの人びとの平和への熱意に負うているのである。』『この書を多くの方々の前にさし出すこと自体が，わたくしたちが心理学者としてなしうる平和へのささやかな貢献になればと願っている。』第Ⅰ部は「心理学者はいかに平和に貢献するか」であり，提言（その1）乾孝，提言（その2）中川作一；1．オスグッドの平和心理学について—田中靖政；2．平和のための「関係」心理学—松村康平；3．平和問題の社会心理学—南博；4．平和と心理学者—城戸幡太郎；質疑応答。第Ⅱ部は「心理学は国際関係の改善に貢献できるか」であり，1．今田恵；2．佐藤幸治；3．F. K. Berrien；4．U. Bronfenbrenner；5．E. Holas and D. Tollingerová；6．J. Reykowski；7．M. Rokeach；8．G. Singer；9．R. Taft；10．T. Tomaszewski；11．D. Bélanger である。

「平和のための心理劇」（昭7回国際心理劇・社会劇会議，1972年3月29日から4月4日，東京開催の集録）が刊行されたのは，同年（1972年8月13日から19日まで）東京で開催された国際心理学会の会期中である。心理劇を“世界平和”のために，の呼びかけと幾つかの提言を（議長として）行ない，参会者が全員でまたグループごとにする実践活動が展開された。

これより先（1969年）に筆者は，『世界平和と幼児教育』を執筆でき（「幼児の教育」8月号9月号，日本幼稚園協会），同年11月には，編著「児童臨床学—体系「児童学」研究—」（光生館）の刊行を迎えることができた。次いで，人間科学としての児童学の立場から編集された「児童学事典」（浅見千鶴子共編，光生館）が刊行されている（1972年3月）。

「人間発達に関する関係学的考察」（お茶の水女子大学大学院博士課程「一般講義」開講の初回および第2回目を担当して行なった講義（学習内容），1976年9月・10月。「人間文化研究年報」お茶の水女子大学人間文化研究科，1977年に掲載）においては，1．人間科学の課題と方法。2．人間発達への関係学的接近。3．人間諸科学の関係学的研究，について論述した。『関係学は関係弁証法を基礎理論とし，その理論即実践活動の発展およびその発展をもたらす諸技法の開発とともに構築されつつある科学体系である。現状況におけるその理論科学としての特色は，「かかわり」（関係）構造の分析をすすめて，人間の根源的な自己・人・物の接在共存関係状況を究明し，複雑な人間諸現象をその状況の顕在化の過程においてとらえ，関係発展の実践活動を促進する理論的枠組を提供しているところにある。「相即」的認識，たとえば，診断「即」治療という認識に立つ実践活動は，1953年ごろには開始され，1955年ごろには，相即的発展，三者関係の原理に立つ理論即実践活動が展開し，研究即実践の方法（技法，たとえば役割技法）が開発され，心理劇運動が急速に展開しはじめて，1960年には関係弁証法の立場をとる著書（共著「適応と変革」）が出版され，次いで1961年には，理論篇と実践篇からなる，わが国で最初の体系的な心理劇書「心理劇—対人関係の変革—」が出版され，ここでは関係論（関係弁証法）に立つ人間関係の変革・発展の方法論が解明されている。1965年には，大学院家政学研究科児童学専攻修士論文：黒田淑子「児童臨床の関係弁証法—関係弁証法の立場とその教育相談における展開—」が，続いて1976年までに20に及ぶ修士論文がうまれている。1973年には，関係学研究編集委員会による「関係学研究」が創刊され，1977年度・第5巻が出版され，また，1975年5月には，「関係学協会」が設立され，講演会，研究会，「関係学講座」，研修会などを開催して活発に運動を展開している。』（1980年2月現在までには，修士論文33篇，「関係学研究」は第7巻まで刊行され，関係学協会からは機関誌「かかわり」がNo. 2まで刊行されている。）「関係学会」が設立されて，関係学会総会第1回研究発表会は1979年6月17日，東京・国立教育会館を会場として開催された。

筆者の立場は，人間科学としての心理学，人間科学としての児童学，関係学（「関係学の基本的構想—研究法としての心理劇—」1978年6月17日，関係学協会主催の講演，「かかわり」No. 2に掲載），人間科学の基盤としての「関係」学（関係学会総会記念講演，1979年）にある。この立場から，論述をすすめてきて，そうしてさらにここに，どのような提言をすることができるだろうか。

Ⅶ

人間の世界における諸科学は，それが「人間の科学」である限り，そして，科学であることにおいて「認識の

対象」とかかわって構成されるものである限り，人間はどのような状況において，どのような対象を措定し，その措定する対象とどのようにかかわって認識を成立させ「人間の世界」の発展をもたらそうとするのか，このことが明らかにされなければならない。

人間は，宇宙的規模においては，人間・有機体（動植物）・無機物の，また，人間的規模においては，自己・人・物の，接在共存関係状況における関係的存在である。この関係的存在である人間のその関係を構成する単位（関係の担い手。かかわり合う主体となる自己・人・物）は，かかわり方に焦点をあてて次のようにいえる。：自己とは，主として，内在，内接，接在の，3つのかかわり方が可能な機能的存在である。同心的，共接的，交叉的な存在のしかたに接存する統合体である。；人とは，主として，内接，接在，外接の，3つのかかわり方が可能な現実的存在である。共接的，交叉的，併存的な存在のしかたに接存する統合体である。；物とは，主として，接在，外接，外在の，3つのかかわり方が可能な実在的存在である。交叉的，併存的，自在的な存在のしかたに接存する統合体である。

人間の発達（人間の世界の発展の一位相）は，人間の根源的な「接在共存状況」の顕在化の過程（通時的構造化の過程）であり，自己・人・物の接在共存状況における「自己」の発達は，「接在共存状況」の自己における構造化の過程（人および物との共時的構造化の過程，動機→経過→結果→動機→経過→結果の継時的発展過程）である。（松村康平・佐藤啓子「関係の発展にかんする一考察—関係原理の展開について—」関係学研究第4巻第1号，1976年，参照）

人間の根源的な接在共存状況（の発展）において成立・展開する諸科学の研究法については，措定される対象との「かかわり」に焦点をあてて次のように大別できる：外在的‥‥実験法；外接的‥‥観察法；接在的‥‥行為法（たとえば心理劇法）；内接的‥‥問答法，相談法，臨床法など；内在的‥‥内観法，内省法など。これらの研究法は，人間の根源的な接在共存状況において展開することから，どれかひとつの「かかわり方」（研究の仕方）のみによつて研究活動がすすめられることはない。しかし，その主要な研究活動が主としてどの「かかわり方」（研究の仕方）によつて展開するかに関して，諸科学は次のように（「かかわり」に焦点をあてて大別した叙述の順に）類別することができる：自然科学；社会科学；人間科学（狭義のもの。生活科学，労働科学など）；教育科学；人文科学。接在的共存関係状況を志向する人間のための科学的研究（狭義）においては規範学が成立し，接在共存関係状況の顕在化の過程の科学的研究においては歴史科学（ほか，人間発達学など）が成立する。

人間の，自己・人・物の接在共存状況における活動は，自己や人が，関係的に存在して感じ考えふるまうことがあっての活動である。この活動の科学的研究において心理学が成立する。この活動が「人間」の発展をもたらすことを明確にして，より発展的な意味をもつ活動のもたらされるように，自己や人が参加し，その参加しふるまう仕方を明確にして，さらに多くの人たちが参加しふるまえるようにしていく，その行為の仕方が「心理的技術」である。この「心理技術」については，また，次のようにいうことができる。心理技術は，自己・人・物の関連体系としての人間の活動が，成立・展開・発展する場面状況を，意図的に設定する方法（技法）である。（伊藤祐時・松村康平・大村政男編「心理技術事典」朝倉書店，1977年，参照）

関係の理論，関係学的研究は，人間諸科学のために，また，人間諸科学の緊密な連けいを成立させ学際的研究を発展させるために，必要である。接在共存状況の発展を志向して関係状況の構造化をすすめ，相対的に独立する連担可能な研究活動諸領域を明らかにして，連担活動を促進することは，関係学の課題である。そして，人間の接在共存活動の発展に有効な「行為法」は，関係学においてもその理論構成・技法開発・実践活動に有効であり，人間の科学の諸領域において広く活用されることが期待され，また，関係学の概念的枠組の構成に重要な役割を果たしてきた「トポロジー（Topology）」から，「不連続現象を探究する数学的省察へとすすんだカタストロフィー（Catastrophe）」と接在関係を成立させての研究も重要な「関係学の課題」であろう。（野口広「カタストロフィーの論理」講談社，1973年，ほか参照。関係学と接在関係を成立させ，対応的に説明をすすめることでどちらにおいても構造化が促進すると考えられるものに，たとえば「地割れ」の現象がある。関係学の「5つのかかわり方」で対応的に解明できる。また，カタストロフィーにおいておこなわれる説明の論理に「三層構造の論理」をとられることができて，「関係弁証法」における3者関係の論理，自己・人・物の3者がかかわる存在の仕方の認識を，促進することができると考えられる。）』（「人関発達に関する関係学的考察」前出，1978年）

ここにおいて，2つの著書・ふたりの著者の立場と，この論述・筆者の立場との「接在関係」を問い，どのような提言が接在関係の発展をもたらし，読者との関係の

発展をももたらすことができるだろうかを，新たに課題として考察をすすめ，この論述に一応の終結がもたらされるようにしていこう。

著者たちは，人間の接在共存状況において具現する典型的な活動としての「労働」に，研究の基底をすえている。その労働についての見解は，著書においては必ずしも明確には述べられていない。しかし，次のような見解には近くその立場をとるものと考えられる。『人間は，労働において対象化に到達し，対象は人間化される。自然の人間化とみずからの意図の対象化（現実化）において，人間世界を創造する。人間は，世界（みずからが創造し，意義づけた世界）のうちに生きる」この考察から「労働が絶対的にすでに経済に属し，それがもつ性格からいって，＜当然＞な経済的概念であるかのような仮象を追い払う」そして「経済の場を，社会的一人間的現実のうちに確立した。』（松村康平「労働と人間関係―関係弁証法からの考察―」労働の科学，第25巻3号，1970年。文中の引用文は，カレル・コシーク著・花崎皋平訳「具体性の弁証法」せりか書房，1969年。改訳が「具体的なものの弁証法」として，1977年に出版されいてる。）筆者はその稿では『自然の人間化とみずからの意図の対象化（現実化）において創造される人間的世界から，考察をすすめている。この人間的世界における活動を，対概念の弁証法的統一がそこで実現される＜能動的中間項＞としての労働と対応するものとして，そこでの物（対象化された構築物の実存，持続する生産物）と自己（思考する存在，現実を形成することのできる創造的な自己）と人（人と人との関係，狭義の人間）との関係発展の考察をすすめ』ている。『人間的世界における関係（人間関係）発展の活動は，それにおいて物および自己の形成される＜媒介活動＞である。そして，その活動における物および自己のそれぞれの形成が，他の形成をもたらす媒介活動である。物の形成（注．宇宙船を例にひいて叙述がすすめられている）（宇宙船の内部環境および宇宙船全体の構築の意味変容）が，人の形成（船内の人と人，船内の人と船外の人，船外の人と人との関係の発展），自己の形成（船内のひとりひとり，船外のひとりひとりの自己関係の発展），および人と自己との関係の発展（人の形成における関係に含めてとらえることもできるもの）をもたらす。このような人間的世界における諸関係の発展が，相互媒介的にもたらされる活動（「労働」の人間的世界における実現）において，たとえば，人間（人，集団）がどのような物と物との関係に参加してその発展をもたらすとするかの決定（投企）ができる。』『人間関係の展開が，たとえば地上の人との関係とも宇宙の物との関係ともあたかも無縁であるかのような，宇宙船の内部の活動におけるものである場合。そこでも，人なり自己なりの関係の変化が，人と人との結合を強め，自己の体験的事実としての充実感・楽しさなどの成立が可能である。外部との境界領域が強固で，内外の流通が困難な場合で，しかも，そのことが領域内で関係的事実として成立しないと，人あるいは自己との関係における物は，操作可能な物として，道具的意味をもちやすい。物の存在としての厳然とした事実，それの人あるいは自己との関係におけるきびしさが，発揮されにくくなる。そのような場合の人間関係を発展的とはいえない。特定の職場が，他とは孤立していての職場内での人間関係が展開しているのであれば，楽しい体験が成立しても，それがより発展的な関係に位置づくものとしていかなければならない。その対策は，職場の雰囲気の醸成をこえて，職場間の交流，職制，会社の機構，社会体制へと向けられる必要がある。』『あの宇宙船を地上にいて操作する人たちは，その人と宇宙船と宇宙とのどのような関係の発展が，その人と宇宙船（構築物）と宇宙船に乗る人との関係の発展をもたらすかを，決定しなければならない。』（このような「関係的思考」の展開および決定は，原水爆禁止運動，公害対策などにおいても行なわれるべきである。）社会集団内対人関係に焦点をあてての人間関係の理論・技法・実践だけでは，労働とのかかわりにおける活動の関係的発展を充分にはもたらすことができない。このあとを『強調する。そして，しかし，また，つけ加えて述べておきたいことは，宇宙船と宇宙との物との関係に対応する社会関係の発展を，直接にはもたらしにくい集団内関係活動であつても，そこにおける人・物・自己の関係の発展が，たとえば「目的志向的社会心理劇」において実現されれば，そこでの理論的認識・技術的操作（行為のしかた）・実践的体験が，その集団をこえたところで展開する幾多の関係について，どれが人・物・自己の関係発展であるかを識別するのに，また，関係に参加し発展を促進するのに，きわめて有効である。つまり，特定集団での，人・物・自己の関係の生活縮図的・典型的な認識・操作・体験は，人・物・自己，社会・集団・個人の関係発展の媒介的機能を果たしうるということである。』

「労働と人間関係」についての「関係弁証法」からの考察は，2つの著書に即して行なわれたものではないにもかかわらず，極めて多くの接在関係領域を描述している。関係弁証法の立場からは，極端な言い方をすれば，人間の世界における人間の活動はどれもが接在共存状況における活動であることにおいて，どの活動をも人間の

世界の発展を促進する活動として位置づけることができるが，２つの著書および本稿の論述には，接在共存関係の発展を志向する人間の活動（人間愛，人間科学への歩み）が展開しており，３者における一般共通性・典型類似性・個別差違性の認識を成立させて，さらに関係的思考を発展させることができる。詳察のためには，たとえば，①現代文化心理学，②人間科学への道，③本稿の論述に関して，①と②と③に対応的思考を展開して一般共通性をとらえ，①から②，②から③，③から①（ほか，②から①，③から②，①から③）に類推的思考を展開して典型類似性を，①と②と③のそれぞれにおいて①と②③，②と③①，③と①②の対比的思考を展開して個別差違性をとらえ，さらにそれらを統合する関係的思考を展開する必要が生じる。このように詳察をすすめて実り豊かな成果をもたらすことは，しかし，①，②，③のそれぞれの立場からする研究の内的発展をみての今後の課題として，ここではなお若干の考察（提言）を加えるにとどめて本稿を結ぶことにしよう。

人間の活動は，どの活動をも人間の世界の発展を促進する活動として位置づけることはできても，それが人間の接在共存関係活動の発展を現実に阻むもの（敵対するもの）として機能する場合には，鋭く対決して，その存在の意味を変え，また，未然に防止するなどの処置をとらなければならない。接在共存関係の発展を志向する活動の体験およびその体験の重要性が認識されていることは，それが関係の発展を阻む活動であるかどうかの敏速・明瞭な識別を可能にする。

「人間科学への道」において，著者が随処で提起する問題・著者自身への設問を追うことは，著者の立場を浮き彫りにする。断定的な命題の「叙述文」も交え，著書のページをたどって，抜粋しよう。〔序〕において：○心理学について抱き続けた疑問を解決しようとした過程において生み出された，さまざまな次元の論文を集めたもの。○心理学は人間科学の一部として位置づけられることにより，その意味を明確化し得るという構想。〔第一章〕：○‥‥やわれわれのように現実にあらわれる状況の分析から出発する，いわば実践的立場に基づくテスト理論等。○渾沌にえぐられた穴自体の構造を深く認識し，そこに示されるものが語りかけるのを持つという立場。〔第二章〕：○デジタル型思考の展開。○アナログ型思考を求めて。○「創造性」とは何か。○尽きぬ疑問が湧いてくるようである。しかし，こういう疑問をふたたびコンピューターにシミュレイトとし，もっとつめていけば思考の本質がより明確化し，それがまた，コンピューターに反映し，その機構の発達を逆に促すことになるであろう。これらの繰り返しが，現在より飛躍的によい思考能力のテストを作成する手がかりとなるであろう。こういう過程のみが，「創造性」に至る正道であって，それを外的基準に求めようとする従来の心理学的諸研究は，結局，曖昧な結論しか得られないと思われる。すべてが将来にかかっているのである。これが，この貧しい遍歴の「結語ならぬ結語」である。〔第三章〕：○しかし，『芸術と錯覚』で述べられ，『芸術による視覚的発見』において精錬された彼（ゴムブリッチ）の見解のうちには，芸術の本質に迫る鋭い洞察の存することを，認めざるを得ない。そこには，真の心理学の母胎があると，わたしは思うのである。○しかし，残念なことには，心理学は，ゴムブリッチの提示した問題には深く触れていないのである。いや，むしろ，そこに問題があることさえ意識していないようである。○李白の詩のうちには，かつて彼の学んだ文化遺産が，まったく新しい形で再認され，創造的に再生されているのである。杜甫は，李白の詩を「清新俊逸」と批評した。その時，彼は，天才李白の詩の真相をいいあてたばかりでなく，創造的再生の実態をみごとに表現したのである。○こういう深い再生・再認という事象が，心理学であつかわれるのは，いつのことであろうか。〔第四章〕：○公理なき心理学。○心理学の公理。○しかし，以上のような説明だけでは，至適化という概念には，数え切れない多くの問題が残されることになろう。それは明瞭に最大化とは異なった概念であることは否定できないが，まだ十分に吟味された共通の認識の存在する概念ではないことも確かである。しかし，現在の心理学においては，粗放ながら，あらっぽい断案の提示がまず必要であると考えられる。そこで，もっとも乱暴な形で，上記の公理を，心理学の公理として提案した次第である。再録すると次の通りになる。「人間は意識的に各生体群の存在の至適化を目指し得るし，また，それを目指さなければならない。この努力を行動面において捉える研究を心理学という」。〔第五章〕：○現実認識の視座設定の基盤としての実験。○労働を内側から捉える方法について―シモーヌ・ヴェーユの『工場日記』について―。○しかし，産業行動学の立場からみれば，なんと愚かしい問答であろう。試みに，最初の荘子の呟きを次のように替えてみよう。「労働者が苦汗に満ちた作業を強制されている。これこそ労働者の苦しみである。」○現代の論壇には，労働者の実態を無視して勝手にそれを創作し，単に頭のなかで資本論から演繹した「疎外論」をこれにあてはめる論文が多い。これらの諸論文には濠濮（ごうぼく）の問答に表われる詭弁・空論からどれだけ進歩がみられるといえるのであろうか。

○彼女は，魚になることの困難さを熟知していたのである。彼女は，普通考えられているような単純な体験主義者ではないのである。○このわたくしの考えにしたがえば，女工生活を終えた後で工場生活を回顧したヴェーユの筆のほうが，彼女の「工場生活」の「現実性」を写して，その『日記』よりも精彩を帯びるのが当然であろう。○労働の苦しさという彼女の観念に現実をあわせていたようである。○これらの労働者は，職場においてのみ抑圧された人間である。それを真実の全体的人間としての労働者と誤認したところから，晩年の彼女の思想と生活の荒廃が生じたのである。○彼女の『日記』は，労働者を内側から捉える方法の破綻を意味するように思われる。○実験は，現実をさらに精細に分析する手掛りとして使わるべきである。○みようとするもの以外はみられない。○そして，たまさかにしかこういう記録に表われない無告の民，その現実を直視し，そのイメージをもつことが産業行動学の原点でなければならない。いやしくも，産業行動学者たるものは，ひとつの職業名をあげられた場合に，それに従事する人びとの作業と生活とをありありと視覚化し，映像化することが可能でなければならない。それを可能にするものは，実験で鍛えられた柔軟な視座による行動の客観的分析であろう。○シミュレーション実験が現実の事態を理解する方法としてはあまりにも貧困であること‥‥しかし，それが現実の工場労働に比べて幻想的な場面しか構成し得ないことは事実であるとしても，実験自体が厳として生きた人間の行動を取り扱っていることだけは間違いない。〔第六章〕：○先導するイメージ。○人間が現実の絵画を鑑賞する場合，それを描いた作家のもつ個性の認知をはなれては，何を見ているのかわからなくなつてしまう―以上が今まで述べたところの要約である。○したがって能とは無関係にこれを鑑賞することも可能にはちがいないが，この絵の中から響いてくるテーマは，「入日の影も舞うことかや」と「日想観」によせる弱法師の深い感慨であろう。そして，盲目の乞食の身分でありながら，転倒するまで遊狂をほしいままにする彼の悲惨な光栄と美しさを知らなければ，この絵の鑑賞は結局不可能でないかとわたくしは考える。すなわち，経験説をとらざるを得ないのである。○思うに絵画鑑賞の場合には，それが当然ではなかろうか。見る人，見られる絵を描いた人，それぞれ固有のパターンをもっている。そして，その固有のパターンが真に彼自身のものになった時，人ははじめてものを描き，かつ見るのである。観山の「弱法師」を鑑賞するためには，それなりのイメージが必要である。○練磨を重ねて極限に近い眼では“網膜が考える”。見る前に投げる。しかし，それよりはやく“網膜”がすでに動作を決定している。この段階の人においては，現実と動作の結果とが遭わないことがあれば，前者が修正されなければならない。○観客と演者のイメージが合致するような能楽の成立は至難のことである。わたくしには，自分のイメージと合致する能楽を味わう機会はもう残されていないであろう。○芸術のイメージは，前述の通り，個人のもつ資質からだけではなく，個人と古典的なもの，規範的なものとの出会いによって発生する。そして，その発生には，古典のうちからその個人だけにしかつかむことのできない新しい何物かが参加している。この間の事情を解明するには，真の天才の作品の克明な分析が必要であろう。というのは，天才とは，結局，人間の各種の能力が極限化された存在であるからである。○天才ならぬわれわれは，日常生活においては典拠による再認しか行ない得ないのである。○それは，産業行動学のようなより現実的な課題を取り扱う学問においても，ひとしく切実な課題となっている。というのは，イメージこそがわれわれの実生活に絶えず生じている心理学的事実であるからである。○わたくしは，芸術における創造の精神に着目したことのないものには，これらの問題の真の解明はおぼつかないと考える。〔第七章〕：○現在の心理学研究においては，計量化され得ないもの，言語化され得ないものについては，“話をするのが不可能なこと”として“沈黙せねばならない”のである。○わたくしは実験室内の実験のみを尊重する心理学の現状には不満であり，心理学はウィトゲンシュタインのいう「いつも眼前にある」事象から出発すべきであると考えている。○日常生活を生き抜いている「常民」の生活と直接かかわりあう研究。○同じような態度で「日常性」を問題にしている人はわたくしだけではないのである。○ルイスの「羅生門式手法」。○古典における比類なき澄明な世界のもとで「日常性」の悲劇はまざまざとその本質を展開する。「日常性」の心理学者は，無意識の中に，古典を「地」とし，「日常性」を「図」としているのである。○フロイトのオイディプス・コンプレックスは，今や確固とした古典の位置を占めたように思われる。おそらく「日常性」の一部分は，彼の作った「地」のもとで明白に解釈されるかもしれない。しかし，わたくしのいう「日常性」の心理学の「地」としては，彼の概念は狭すぎる。ソポクレスのオイディプスに関する作品は，まったく新しい「地」として，再解釈さるべきではなかろうか，という。

このような，上述してきた「人間科学への道」と，関係学（関係弁証法）になじんでいる人は，その同じ道

の自転車道と歩道を，それも時には交叉したり，ひとつにもなって走る道を進んでいるもののように，とらえることができるであろう。とはいえ，進み方のちがいは見出すことをするだろう。仮定的に自己が否定され，他者もまた仮定的にそれは肯定されて，後に，他者の否定を媒介に，自己肯定の可能性を見いだそうとする一連の過程が，「人間科学への道」に展開する。そして，あるときは，１つのものを２つにわかつ認識活動が展開する。それは，関係弁証法の立場からは，２者関係的な弁証法と呼ばれる活動である。関係弁証法は，３者関係的な接在共存状況発展活動であって，３者が相互媒介的に状況構造化を促進する。その活動の展開が「人間科学への道」と異なるところを，たとえば，他者との否定的関係活動が顕在的には展開しないところに見いだせるであろう。そして，また，たとえば「常民」の生活と直接かかわりあう研究の，そのかかわりへの立入った考察の余地が残されていることを見いだすであろうし，また，ひとつの職業名をあげられた場合に，それに従事する人びとの作業と生活とをありありと視覚化し，映像化することを可能にするものは，実験で鍛えられた柔軟な視座による行動の客観的分析のほかに，生活縮図的場面を設定し，演者・補助自我・監督・観客・舞台によって展開される社会心理劇であり，それが５つのかかわり方に対応する５つの役割行為によってさらにその効果をたかめることを，声を大きくして叫びたくもなるであろう。さらにまた，「日常性」にかかわる研究者の活動は「人間科学への道」に示されている方向のほかにもあることを知っており，そして，示されている方向をとる活動との接在協力によって，新たな発展の方向を創りだせる見透しを成立させることもできるであろう。（日常生活の身近かな問題をとりあげ，「能動性の心理学」の書「自分が挫けない法―勇気をつくる心理学―」青春出版社，を執筆したのは1963年である。）「日常性」の心理学は，応用心理学，具体的心理学との関連においてその性質を明らかにする必要がある。

具体的心理学。波多野完治氏（先生）がフランスのマルクス主義心理学の先覚者としてあげておられる２人，ジョルジュ・ポリツェルとアンリ・ワロン。その前者の心理学について，解説されている論述を，ここに引用させていただく（Ｊ・Ｆ・ルニ著，波多野完治／真田孝昭訳「心理学と弁証法的唯物論」大月書店，1976年）：○ポリツェルが古典心理学という語でよんでいるのは，ヴィクトール・クーザンという十九世紀の哲学者が定式化した「意識中心」の心理学である。○ポリツェルの信頼した応用心理学は，初期のものであった。大衆社会に猛威をふるうようになる人間操作の学としての応用心理学は，ポリツェルの時代には，まだすがたをあらわしていない。ポリツェルは，古典的心理学にたいする意味での実践の学としての「応用心理学」に期待したのである。この点，誤解があってはならないだろう。○応用心理学を，このように「人間についての変革の科学」という風に考えてみると，それは，古典的心理学のように，抽象的，形而上学的であってはならないだろう。そこで，ポリツェルは，この新しい心理学を「具体的心理学」psychologie concrète となづけた。○具体的心理学の目ざすのは，「いま」「ここ」にいる人間心理の把握である。ここにいう人間心理は，「歴史」の産物であるから，具体的心理学は，歴史をふくまねばならぬ。個々の人について，歴史と社会とをふくんだ心理学の研究が，具体的心理学の第一になさねばならぬことである。／つぎに具体的心理学は，実践的，経験的心理学である「人間知」を大いに参考にする。人間知は，人間が他の人間とかかわるうちに，経験的におのずと身についてくる「知恵」である。だから，それは真理をふくんでいる。具体的心理学は，それを吸収しなくてはならぬ。／しかし，具体的心理学が人間知のよせあつめになったのでは，それは，「経験主義」の盲目性からのがれることができぬ。具体的心理学は，人間知に依存しつつ，それを法則化し，それを理解し，それの体系化を考えねばならぬ。こうしてはじめて，人間知は科学のなかにその位置を見出すことになるのである。○このような，人間知の「理性化」としての具体的心理学の原理を，ポリツェルは「ドラマ」にもとめている。／ドラマは，今日一般に「芸術の一種」とみられている。しかし，ポリツェルのいうドラマとは，芸術品として価値を云々される以前の，人間と人間との関係である。人間生活（vic humaine）そのものがドラマだ，という考えなのである。／ドラマは，人間と人間との関係において生起するものであるから，したがって，そこには，人の意図，人の意図の理解，人と人との相互認識，が存在することになる。／いままで「道徳ならびに政治諸科学」sciences morales et politiques といわれていた，歴史学，経済学，政治学などは，このドラマの「ワクぐみ」を説明してくれる。／歴史学はドラマの時間的ワクをあきらかにし，経済学はドラマの経済的ワクをはっきりさせてくれる。しかし，それ以上のことはしない。ドラマ自体のプロセスは心理学によって説明されなくてはならぬ。／このようにして，具体的心理学は，ドラマの把握に成功するとき，それははじめて心理学として成立しうることになるのである。○著者はこれに続けて，『ポリツェルのこの考えは孤立した

ものではなかった』として，アメリカでほぼ同じころに人間行為のドラマ的理解の考えに達していたケネス・バーク，「心理劇」運動をはじめたヤアブ・モレノをあげてから，『日本の松村康平は，心理劇をもっぱら「生活弁証法」の立場から発展させようと努力している』と，筆者の立場を位置づけてくださっている。(「生活弁証法」の立場から日本ではじめて「人間発達」の研究を行なわれたのは，牛島義友先生である。) ○つまり，人生をドラマとみたり，またはドラマによって，精神の解放をはかる（精神治療をする）ということは，いずれもドラマの弁証法を軸につかっているのである。○いずれにせよ，二四，五歳で，こういう劇的心理学を考えたポリツェルの構想力はすばらしいものといってよく，その彼が若くして，ナチに惨殺されたのはフランスのマルクス主義心理学の大きな損失であった，といわなくてはならない。(ジョルジュ・ポリツェル，1903～42)

○人間科学への道は幾筋も拓かれている。人間科学としての心理学への道も，そうである：○人間性を強調する心理学（研究促進者）から，その人間性を無視したり排除して科学としての心理学はこれのみのように主張する心理学（研究者）と措定される「実験」心理学の研究者が，その冷厳さ，偏狭さ（たとえば，その偏狭さをともなう実験の施行において被験者＜他者，自己・人＞を使うために行なわれる工作）などへの反省・改善は必要であっても，人間は自己・人・物の接在共存関係的存在であるから，研究法に関して，たとえばそれが，物(人)と人との関係において，主として人（物）活動の展開される(または，その活動を予測して場面設定のなされる)諸技法，あるいは，物（人）と物との関係において，主として人（物）活動の展開される（または，その活動を予測して場面設定のなされる）諸技法であり，それらを主要な研究法（研究技法）として体系化される心理学であって，人間の関係的発展を促進するのに必要な役割(研究活動機能)を連担するものであると認識されて研究が進められるなら，この「実験心理学」も，人間科学としての心理学への道を歩んでいることになる。○「現代文化心理学」と「人間科学への道―心理学の立場から―」の２者について，一般共通性は，「労働」に研究の基底をすえているところにとらえることができる。典型類似性は，たとえば後者における『芸術におけるイメージは，個人のもつ資質からだけでなく，個人と古典的なもの，規範的なものとの出会いによって発生する。そして，その発生には，古典のうちからその個人だけにしかつかむことのできない新しい何物かが参加している。この間の事情を解明するには，真の天才の作品の克明な分析が必要であろう。というのは，天才とは，結局，人間の各種の能力が極限化された存在であるからである。』また『古典における比類ない澄明な世界のもとで「日常性」の悲劇はまざまざとその本質を展開する。「日常性」の心理学者は，無意識の中に，古典を「地」とし，「日常性」を「図」としているのである。』などの叙述。この叙述から類推して，後者における川端康成の作品の克明な分析に，そして次のような『素人娘とも芸者ともつかぬ駒子が，一本立ちの芸者になっても，まだういういしさを残し，現代女性像のある種の典型として，男性から愛される造型の創造をなしとげたこと』『川端文学が電子顕微鏡じみた仕掛けによって拡大させて見せてくれるミリミクロンの世界は，ほとんどすべて現実そのものなのだ。現代人はみずからの理性を過信し，そのような世界を彼から突きつけられるまで，また“非現実”だといってとりつくろおうとする。遅れてわかったとしても，ほんとうの“現実”が大切なのだ。康成は，その意味での科学精神，合理精神に富んでいた。しかしながら，表現形式においては，まったく逆の見せかけをもつ方法を多用した。非科学的な現代人を一時的に安心させるために。』などの叙述に。また，「現代文化心理学」における『研究者にも，これまでのような貧困な人間性から脱却して，文学者に劣らないような人間知をそなえなければならない』という叙述から類推して，「人間科学への道」における『イメージこそがわれわれの実生活に絶えず生じている心理学的事実である』『芸術における創造の精神に着目したことのないものには，これらの問題の真の解明はおぼつかないと考える』などの叙述に，両者の典型類似性を，とらえることができる。○個別差違性（独自性）はここでは「現代文化心理学」の著者に焦点をあてて考察する。著者が，川端文学，とくに登場する人物との共期性を執拗に追究し高揚させるのは，康成において『この二〇世紀が，まだ十分に成熟した文化レベルの達成をおこなっていないこと，とくに日本での後進性が，なみなみでないこと』が見ぬかれていたこと，『そして古い王朝文化に仮託したり，少年少女の作文や旅芸人への思いやりに寄せながら，表層文化の裏面に対する照射から，社会批判を続けていたこと』においてであり，著者は『川端文学の見直し作業をおこなえば，まったく新しい独自の価値が生ずるという報告』をしている。著者は，『戦前・戦時の日本文化が，女性に関する限り，アンチ・ヒューマンで，武士道的禁欲主義を庶民に押しつけていたから，康成の女性観は，非倫理的に思われがちであったが，相対的な進歩性を持っていた。ゆえに＜神性＞は』『康成の主観に基づく“女性の感情”

は，リアルで美しい。それは確かに，彼が＜神性＞を彼女たちの心のうちに認めているからであろう』その＜神性＞は，『＜民主主義＞に通じるものがあった』という。そして著者は，『さらに，彼の“貧之文学”は，日本のプロレタリア文学がタブーとしていた＜セックス＞を，しばしば，というよりも，もっと多い頻度で取り上げて，ある意味では“プロレタリア全体の文学”として，補完作用を果たしていたともいえる』という。『彼の作品は，初期から一貫して社会的に＜弱い者＞を題材に選んでいる。』『主要な題材は，元来が社会的階級的矛盾のただなかに生きている＜弱い者＞の特性である』その者をさらに美しく描くことによる変革（地と図の機能転換），反体制的でありながら『日本社会が日本文化の禁欲水準を上下させるのに連動しながら，彼はその許容された水準すれすれまでに密着させる自己の文学技術』によって『“潜行”する必要はなかった』ことなどは，著者の永続的な関心事となっているのであろう。そして，この，とくに“弱い者”への関心と一体なほど緊密な関心がいだかれ，実践された活動，それは，著者が『人生の一時期において，情熱と愛情をかたむけながら，日本の患者運動および生活記録運動について，文化心理学的観点から執筆を続けていた一連の著作』である。「現代文化心理学」に掲載されているのは極く一部，『長島愛生園の機関誌「愛生」1960年6月号所載「深い淵から」の社会的反響について（講演記録）』の，集団の麻痺症状（A）および拒絶的傾向（B）の部分についてであり，あとは次の文献にまかされている《しまだ・ひとし「労働の回復―永丘智郎―」＜知識人のらい参加・その一＞〔附，永丘智郎　らい療養所刊行物執筆一覧（＝全七三篇），らい詩人集団季刊誌『らい』，20号，長島愛生園内・同集団，昭和47年9月》その，たとえば，『「深い淵から」の社会的反響について』という講演記録全文をここに記載したい思いをとどめて，その幾箇所かを抜粋しよう。『この敬愛園にやっと着くことが出来ました。ずいぶん，長い旅でありまして，途中あちらこちらの療養所に参ることが出来ましたことは，私にとりまして，まことに参考になりました。これから先の私の研究とか社会的活動にきっとプラスになることと考えています。』これは，1956年（昭和31年）9月5日の講演であって，「現代文化心理学」の出版の23年前である。「あとがき」に『ほぼ私が四〇歳台の初めから還暦の年齢に至るまで，約二〇年間におよぶ研究の集積であって，ライフワークと呼んでも差しつかえないものである。それだからといって，格別に自負しているわけではない。むしろ』と書かれている。講演文からの抜粋を続けよう。『きようは「深い淵から」についてお話しすべきでありましょうが，ちょうど私の旅行の終着駅に着いたような気が致しまして，ここでやっといろいろな考えをまとめることが出来たという意味で，ザッパクな感想でしょうけれども私の感じたことや敬愛園について若干触れておきたいと思います。』『さて，いろいろなことを私が述べなければならない用事を持って参りましたために，話を前へ進めさせて頂きますけれど，どこの療養所に参りましても，そしていろいろな人々と社会で会う時にも，必ずといってよい程，あなたは「深い淵から」という本を編集された人だけれども，それは何故そういうものを作ったのですか，あなたがそもそもハンゼン氏病に関係するようになったのはどんな理由ですか，と聞かれることが非常に多かったように思います。それは，この二十日からの旅行を通じても非常に多かったように思います。／患者さんから聞かれることも，職員が聞かれることもありました。私はいつも困ってしまいました。愛生園で聞かれた時には，理由というものは後からくっつけることが多いようだから，私は敢えてその理由を説明したくない。こう申しましたし』『気がかりなことの一つとして私にはハンゼン氏病が気掛りなんです。それはもっといろいろなことが気掛りであると同じように，やはりハンゼン氏病にかかっている人間のことも気掛りなのです。そういう意味で患者さん方もいろいろな気掛りなこともあるでしょうけれども，どうか，もう少し淡白な気持で，人を迎えていただきたい。／自分等に関心を持つ人は何か特殊なすねものであるのか，そういう風にいろいろなことを考えて』『根堀り葉堀り何故ハンゼン氏病に関係したかということを徹底的に聞かないと気が済まない患者さんがいるので，あれこれ理由を挙げる中に，結局私の方で私なりに何か弱点をさらけ出して，いろいろな理由があったのか知れないけれど若しかしたら，』と『申しますと，そうすると患者さんはやっと何か安心して，そして何か人間の弱身に触れたような，そしてそれが本当の理由であるかのような安心した気持になる。そういうことを私は見ききして参りました。然し，そういう風なものの考え方は，これはやはり間違いなんじゃないかと考えるんです。／つまり人間は互いにそれぞれ人間の良さを持っている。私は』『積極的な意味で気になることがあるのです。それは人間のことを，もっと大ゲサないい方をするならば，人間の運命ということに就いて考えます。そして，それはこういうように原水爆などが発明されて，それが決して使われないという保証が得られない今日において，人間はどうなるんだということ，そして人類というような大ゲサなことを言葉でいうのが嫌なら，やは

り人間と呼べばよいのですけれど，その人間がどうなるのだろうかということに就いて，非常に私は気にしております。そしてハンゼン氏病の患者も人間であるという点において私は気にしております。そして，それはまだ世の中に偏見というものがあるといわれ，隔離政策が厳重に守られているんだということ，そういうようにいわれているハンゼン氏病療養所の中で，ハ氏病が治りにくい病気だといわれている今の世の中で，どうして，そういういろいろな困苦に人間が耐えてゆくことが出来るのだろうかどうだろうか，そしてそういう困苦に耐えている人々もわれわれと同じ人間であるという意味において，私はやっぱり気になるのです。そして，それは決して個人的なマイナスの意味で，お互いに何かそのマイナスを慰め合うような意味での，自分はやはり心に何か痛手というものがあって，そしてあなた方も今心に何か痛手がある，そういう痛手を持った人がより集まったら何とかなりやしないか，とそういう考えでは私は決して考えていない。これをわれわれはもっと明確に考えなければいけないように思います。そして私はやはり積極的な意味で考えているのです。それは自分が心理学を勉強した人間として，この心理学というものを使って人間の運命がどうなるかということに就いて，多少手掛りを得ることが出来ないだろうか？　こんな風に考えています。』生活記録運動については，次のように語られている。『自分が人間的な意味で価値を持っているのかいないのか，と考えるだけでその人は十分人間的な価値を持っている。誰にも恐れることなく，自分の人間的な価値を赤裸々にさらけ出した生活記録を書いて頂きたい。そしてそれが最初は不十分であっても，やがて，だんだん高い価値を持つものに変ってゆくということを信じ，ぜひ大勢の人たちが生活記録運動というものを進めて行って頂きたいのです。／そしてそれはどんな形でもよいだろうということ。どんな表現が使われてもいいだろうということ。要するに嘘が書いてなくて，誰でもが読める文章で，自分の考えが十分伝わる文章で，そして自分の人間的な価値を全部さらけ出してあるものならいい。世の中にはとかく小出しにする人がありますが，ちょっとだけ人間的な価値を出し，大体隠して置く，そういう風な人がいますけれど，そういうケチなことはしないで，思ったことはずばずば書いてそれを人から更に批判されながら高まってゆく，そういうような運動がもっと起ってよいように思います。／生活記録というものは平和な社会を築く一つの運動で』ある。

○「現代文化心理学」の著者の独自な体験に基づく論述でありながら，広範な視野からの発想や提言などの多くの箇処に，筆者の立場からの研究，発想・提言などとの典型類似性がとらえられる。次に，「ヒューマニズムと現代心理学」（第13章１）からの抜粋を行ない，筆者の立場からすすめられている研究と関連させてその個別差違性（独自性）の一端なりと明らかにしたい：○『およそ一つの学問が成立するためには，その基底に統一された学問観がなければならない。』『心理学の場合には，その学問観が，同時に，人間観にも繋がるものであることはいうまでもない。』『今の心理学は，かなり国際性の強いものであるが，まだ，地球上の距離がいちじるしく離れている国々では，そのような空間性に隔てられて，学的交流が進んでいない。同じ人間の精神と行動に関する科学が，そのような状態で，果たして，本当に，心理学は，現代において一つの学的体系を保持し得るのかどうかということについて，一応はだれでも悲観的となるであろう。ここでは，そういう現況を十分にわきまえつつ，現代心理学の姿を，むしろ“在るべき”姿において眺めてみたい。』『心理学は，もっと高い理想をもつべきものであって，人間精神の真実を明らかにすることを心がけ，その本来の役割を明確にしなければならない。そして，諸科学の基礎として，心理学的人間観を提供することが目的であらねばならない。』『実存主義的人間観は，ひそやかな形で現代心理学の奥深くしのび入ってきた。』『大量の実験的データを集めつつある人々が，その上にうち建てられた理論の空虚さに気づきだして，むしろ，どういう被検個体から得られたデータであるかということの意味を，今は重視するようになった。つまり，個体の歴史性を重視する考え方が強まりつつあるわけで，間接的には，実存主義的人間理解に近づこうとするものである。』『今の現代心理学は，実存主義と集団主義の結婚を，まさに，これからはじめようとしている段階といえよう。』『現代心理学の盲点として，人間心理の歴史性に関する見解が，未確立であること』『人間を“人生”においてとらえ，その“生活”のなかで，“精神”を明らかにすること，同時に，より厳密な形で精神の“発現形態”を問題とすることに，これからは研究者の眼が向けられよう。そして，まだ学的に発掘されていない庶民の心理思想のなかからも，正しく問題をつかみ出すことがなされなければならない。』『“在るべき”心理学のイメージを正しく得ること』『心理学の対象は精神活動の全領域に及ぶものであるから，そこには無数の方法論が生まれていい。しかし，それらは心理学の対象が無数にあることだと考えられてはならない。心理学の対象は，あくまでも一つである。それは，人間精神の限りない発展を含めた，その全体的活動の姿である。』『心理

表 I

	フロイト	ビンスワンガー	メルロ＝ポンティ	市川 浩	松村康平
立場	深層心理学	精神病理学	現象学	現象学(現実存論)	関係学
(主に捉えられている)位相	精神(たとえばリビドー)が肉体を操縦するかのように捉えられる	身体的状態(たとえば睡眠，覚醒)が意識を規定するかのように捉える	人と自己との関係において，自己に焦点があてられている身体(他人の心と自分の心を両極において，そのあいだに自他の身体を挿入して捉える)	(現象としての身体)主体としての身体 容体としての身体 私にとっての私の対他身体 他者の身体	自己との関係における身体 イ)(自己の関係状況に)内在している身体 ロ)内接している身体 ハ)接在している身体 ニ)外接している身体 ホ)外在している身体 人との関係における身体 イ)(人との関係状況に)内在している身体 ロ)内接している身体 ハ)接在している身体 ニ)外接している身体 ホ)外在している身体 物との関係における身体 イ)(物との関係状況に)内在している身体 ロ) ハ) ニ) ホ) 場面との関係における身体 イ)自己身体的役割をとっている身体 ロ)心理行為的役割をとっている身体 ハ)対人関係的役割をとっている身体 ニ)場面構成的役割をとっている身体 ホ)社会地位皮役割をとっている身体
			co-existence	錯綜体としての身体	(4つの位相を)統合する身体
位相における関係単位	自己 (人)	自己 (人)	(物) 自己 人	(物) 自己 人	物 (場面) 自己 人
関係分化構造	関係単位における身体		関係における身体		関係におけるかかわり方を担う身体
位方性 *	歴史性		体系性(現象性)		志向性 体系性 歴史性
	** ＜一者過去性＞		＜二者現在性＞		＜三者未来性＞

*, **1979. 1.12 松村康平：修論指導にて

学の研究も人間の思想史的展開のなかで考えられなければ低次の精神概念で満足してしまうこととなる。われわれは人間存在の究極的使命とともに人間心理を考えたいと希っている心理学研究者のより多い出現を待望したい。』○上述の抜粋文のなかで，実存主義と集団主義との接在共存関係の発展がまさにこれからはじまろうとしている段階といわれている(初出は，岡本重雄・永丘智郎編「現代心理学概論」朝倉書店，1966年に所載のも

表 Ⅱ

役割類型	役割特性			関連する主要な役割行為	
	個有性	交換性	移動・軌道の性質		
① 自己身体的役割	自己恒常性	回帰性	同軌性	役割胎生または涌出	個（自己）
② 心理行為的役割	心理恒常性	同調性	波状性	役割演技	
③ 対人関係的役割	集団恒常性	定位性	展動性	役割創技	集団（人）
④ 場面構成的役割	場面恒常性	共有性	（通路）敷設性	役割設提	
⑤ 社会地位的役割	（社会）地位恒常性	付与性	定着性	役割取技	社会（物）

註）1979．1.20　松村康平：修論指導にて

表 Ⅲ

	G.H. Mead	J.L. Moreno	松村康平
立場	社会心理学	ソシオメトリー	関係学
役割の性質	自我の社会化過程を説明するための説明概念	治療を促進する道具としての操作概念	変革の対象としての変革概念
役割の次元	言語	言語，動作	言語，動作，存在
役割の類型	social role interactional role symbolic role I-Me	psychosomatic role psychodramatic role social role	self-somatic role psycho-actional role inter-personal role situ-constructive role socio-status role
役割の関係構造	三者的二者関係	二者的三者関係	三者的三者関係
役割の機能	生成（形成）機能	昇華機能	変革機能

註）1978．10．29　松村康平：ミードセミナーにおける講義による

の），ここをとらえて，筆者の立場からの研究を次に掲げ，個別差違性（独自性）が明らかになるようにして，読者の本稿への接近が促進され接在共存状況の発展がもたらされるようにしたい。そのひとつの研究(成果)は，「身体」に関するものであり，ほかの２つは「役割」に関するものである。３つの「表」によりその概要を知っていただきたい。

表Ⅰは，関係学の立場からの「身体論」と諸他の立場からのそれの特徴を，対比的に表示したものである。表Ⅱおよび表Ⅲは「役割構造」「役割理論」に関するものである。（３つの表はどれも，次の論文に掲載されている。千あけみ『仮面の技法に関する研究―能と心理劇（Ⅰ）』関係学研究第７巻第１号＜関係学研究編集委員会＞1979年。この論文の『はじめに』には，次のように述べられている。『本論文は，お茶の水女大子学家政学研究科児童学専攻修士論文（1978年度）を骨子とし，この執筆を機会に，特に関係論的内容に焦点を当て，構成し直したものである。修士論文作成にあたり，松村康平教授のご指導をいただき，深く感謝いたします。また貴重な感想を寄せてくださった心理劇研修会参加者のみな様，さらに独自な研究を可能としてくださった能楽協会のみな様に感謝いたします。』この論文が提出されたのは1979年の１月31日であり，筆者は同年２月１日にお茶の水女子大学家政学部児童学科教授を辞任している。この論文のほかに２篇が関係学の立場から作成・提出されて，３者とも家政学修士の学位を得た。他の２篇は，望

月満寿美「心理劇を方法論とする実証的研究Ⅰ—集団の形態—構造に関する研究—』, 南秋美『人間関係の発展に関する研究—ルールの構造的考察』＜筆者・黒田淑子指導＞であり大半が上誌に掲載されている。）表Ⅰは，上記論文の著者によって論考され表示されたものである。表Ⅱは著者によって，『能では，シテは重要な役割を担うが，そのシテの最も根本とされている表現行為は，「居グセ」である。行為として外側から捉えると，舞台に座して静止しているだけであるが，そこには身体から重心だけを取り出してすべてを表現するという，Action以前の（身体の）存在そのものに意味を見いだす発想がある。この「居グセ」を表現形態とするシテを役割において捉える時，Actionにおける役割のみならず，人間存在そのものにおいて役割を捉えることが必要となる。そのような役割理論として，関係学における役割理論がある』とされて，筆者の構想が表示されている。表Ⅲは，「G・H・ミードの役割理論」と題して，第6回G・H・ミード・ゼミナー（日本シンボリック相互学会JSSSI，行動科学化協会KKK主催，1978年10月29日＜日＞午後1時～6時30分，会場＜国際文化会館講堂＞で発表の際に配布した英文資料＜北野庸子協力＞のなかの一部を日本文で転載したものである。（なお，本会での発表は学会専務理事三隅一成氏の要請を受けて行なうことのできたもので，SSSI＜The Society for the Study of Symbolic Interaction＞前会長のG・P・ストーン＜Gregory P. Stone＞教授＜ミネソタ大学＞とG・I・ストーン＜Gladys I. Stone＞教授＜ウィスコンシン大学リバホール校＞教授を迎えて開催され，同月6日付で三隅一成先生が第1回ミード賞をハーバード・ブルマー＜加州大学バークレー校＞教授と共に受賞されたことを祝える会で，三隅先生の逝去される前年度のものであった。）（表Ⅲの関連文献として，鴨脚（いちょう）清「役割理論」技興社，1976年をあげることができる。）

○本稿（本論述）が日本応用心理学会（会員）に幾分なりとも寄与することを願い，さらに，心理学関係諸学会会員ほか，「人間の科学」にかかわる人たちの関心を少しでも呼ぶことができて，接在共存関係の発展がもたらされ，2つの著書への接近の促進されることを願って，擱筆する。加えて，本稿を執筆する機会が与えられたことに感謝する。本稿Vまでは，ようやく3月終りに脱稿し，それも既に予定されていた締切りの期日を過ぎていながら，ほぼ1か月遅れて後半が脱稿するなど，ご迷惑をかけたことをお詫びする。その間にあって，正田亘教授の誠意にみちた協力をいただけて論述をすすめることができた，謝意をのべる。また，筆者の立場からの論述を可能にしている恩師，同僚ほか，多くの方がたについて書き添えたい思いを，本稿ではとどめた。他日，その方がたについて書く機会をつくるつもりでいる。

（1980年4月28日）